

戦国時代の武士は金銭をいたずらに忌避することなく、実に貯蓄に熱心で、それを実現した者を素直に評価する風があった。

山内一豊の妻の逸話など、その典型的な例であろう。一豊の妻の持参金のおかげで一豊は金十両の駿馬を購入することができ、その駿馬にまたがって大馬揃えに出たところ、主人の織田信長に褒められる。「ずっと浪人していたゆえ貧しかっただろうに、このような駿馬を買い取ったこと、弓矢を取る身のたしなみとしてこれ以上のことはない」と激賞された。

戦場で武功を上げたわけでもなく、ただ高価な馬を買っただけのことでの評価である。無論、駿馬を買えば武功も上げやすくなることを見越してのことだが、信長は金を貯めたことを素直に評価したのだ。信長自身、金銭好きで永楽銭の幟を用いたりした。

黒田如水の重臣、栗山備後も貯蓄に熱心で、このため贅沢を極端に嫌った。他人にまでそれを要求し、家中の者が華美な衣装を身に着けていると、「ケ・ハレ」といふものが世の中にはあるのだぞ」と口を酸っぱくして注意し、高価な馬を買ったという者があれば、「所詮は馬一頭ではないか。倍の値がしたとしても二

## 戦国武士の貯蓄

和田 竜



絵・江口修平

頭分の働きをするわけではあるまい」と、信長とは正反対の理由でこれを戒めた。

栗山の主人、黒田如水についても普段は吝嗇だったことが知られている。

日根野備中という武将が如水に金を借り、その礼に如水を訪ねた際、如水は家臣に向かって「先日届いた鯛を三枚におろして、骨のところを煮て出せ」と細々命じたので、日根野は「随分ケチ臭いな」と思ったとの話が残っている。後日、如水は家臣に、「日根野は最近贅沢なようだから、あんなことを言っただけで暗にたしなめたのだ」と言い訳したというが何のことはない、この当時の武士はだいたい普段は質素なのである。信長の重臣、滝川一益などは普段の着物が一枚しもなく、それを洗っている際は乾くまで禪一丁でいたという。

だが、それもこれも合戦のためであった。いざ合戦となると、武将たちは惜しげもなく貯めた金をばら撒いた。戦国武士たちは徹底したリアリストである。合戦を有利に運ぶには、まずは金だ。それゆえ金を大事にし、貯蓄にも熱心だったのだ。「武士は食わねど高楊枝」というのは、合戦も金もなくなった江戸時代の武士のたわ言かやつかみに過ぎないものである。

わだりょう●1969年、大阪生まれ、広島育ち。早大政治経済学部卒。2007年『のぼうの城』（小学館）で小説家デビュー。同書は累計200万部を超えるベストセラーとなり、2012年映画公開された（脚本も担当）。織田信長軍と毛利家・本願寺・村上水軍の合戦を描いた長篇小説『村上海賊の娘』（新潮社）は吉川英治文学新人賞、本屋大賞2014、親鸞賞を受賞し、上下巻累計100万部のミリオンセラーとなった。



© Shinchosha